

2. 世代、障がいを越えた住民相互のつながりと支え合いの形成

グループ名 地域交流サロン「地域の茶の間」
代表者 石村実

① 活動の目的

活動の拠点である札幌市厚別区もみじ台地区は、急速に少子高齢化が進行している。地域では、住民の孤立の解消とつながり、支え合いの形成が課題となっている。

「もみじ台の地域の茶の間」は、世代を超えた住民相互の接触を目的に、平成20年2月より、地域関係機関、組織の協議体である「もみじ台まちづくり会議」が企画し、シニアを中心とした会議構成メンバーが担い手となって運営している。

地域の公民館にて月1回土曜日10時から14時まで、毎回、地域の高齢者、障がい者、小中学生等約50名が集い、会話、講話、手作り行事食などを行っている。しかし、参加者が年齢、性別、住所ごとに小グループ化し、交流が広がらない傾向があり、今後は、集った参加者間の、世代を超えた交流促進が課題となっている。

「もみじ台の地域の茶の間」は、頭の体操の機会や役割を求める高齢者、会話は苦手だが手先を動かすことは得意である高齢者、スマートフォン普及に伴い書字や手芸工作の機会を求める子育て世代の求めに着目した。習字や手芸工作などの文化活動を用意して、飲み物やお菓子を楽しみながら共通の会話を促すことで世代、障がいを越えた交流を増やし、つながりと支え合いを形成することを目的に、本事業を企画した。

② 活動概要

平成30年10月から平成31年3月にかけて、スタッフミーティングを6回開催し、活動内容の詳細について会議を開催した。以下の通り実施した。

習字については、地域の書道教室を卒業した師範の方に、有償ボランティアにて、テキスト・用具の選定や当日の指導を依頼した。手芸・工作はスタッフが講師をつとめた。

手先の作業が苦手な方に配慮し、習字、手芸工作とともに茶菓子も提供した。助成事業最終月である9月には、交流を促進するために、手作りの軽食（おはぎ）を用意した。詳細は以下の通り。

○5月11日（土）10：00-12：00、ペン習字・硬筆習字、交流

全参加者61名中、23名（うち小中学生5名）が習字に参加した。38名は茶話のみだった。はじめは10名程度であったが、楽しそうに習字を行う姿を見て、他の参加者から次々に参加希望があり、急ぎょテキストを買い足した。講師は赤ペンを持って全員の字

を添削し、アドバイスした。「女学生になったみたいだ」、「久しぶりに真剣に字を書いた」などの感想があった。小中学生は、高齢者から「姿勢が良い」などほめられていた。茶話のみの参加者も、「字なんてしばらく書いていないねえ」など、会話に参加していた。

○6月1日（土）10：00-12：00、工作「ハーバリウム作り」、交流

全参加者38名中、30名が参加した。近隣小学校が運動会であったため、子どもの参加はなかった。講師役のスタッフは、洗濯のりなど、安価な材料でも作ることができるように、試行錯誤を重ねた。「ハーバリウムという名前を初めて聞いた」など、参加者にとって新たな共通話題となった。

○7月6日（土）10：00-12：00、ペン習字・硬筆習字、交流

全参加者45名中、40名（うち小中学生3名）が参加した。5名は茶話のみで、眼や手が不自由であるため恥ずかしい、という理由で不参加となった。知的障がいを持つ参加者が初めて習字に取り組んだ。「先生みて！」と積極的であった。講師や他の参加者から「自分の名前を上手にかけているね」など、励まされていた。

○8月3日（土）10：00-12：00、工作「ガーランド作り」、交流

全参加者51名中、30名（うち小学生2名）が参加した。21名は茶話のみの参加だった。知的障がいを持つ参加者も取り組んだ。比較的手先が器用な参加者が、小学生や障がい者、目の不自由な参加者の制作を手伝うという場面が見られた。完成後、制作者全員の作品を壁に貼り出し、「色づかいいいねえ」など、互いに評価し合った。

○9月7日（土）10：00-12：00、ペン習字・硬筆習字、交流

全参加者54名中、50名（うち小中学生0名）が習字に参加した。テキストが不足したため、買い足し、あらかじめ用意していたコピーの配布などにて対応した。4名は茶話のみだった。漢字の書き順や、手紙を渡す相手などが主な共通話題となっていた。参加者からは「習字も手芸も、これからも続けたい」という要望が多かった。

茶話ののち、参加者全員でスタッフ手作りの軽食（おはぎ）とデザートを会食した。習字という共通の話題を基に、参加者は和やかに交流していた。

以上を開催した結果、習字や手芸工作の機会を用意して、飲み物やお菓子を楽しみながら共通の会話を促すことで、高齢者と高齢者、子どもと高齢者、障がい者と高齢者など、これまで会話をする機会の少なかった参加者間の交流を促すことができた。そして、互いに助け合う、励まし合うなどの様子が見られた。本事業の目的を達成することができたと評価する。さらに、本事業の実施により、以下の効果があった。

- ・習字の好きな高齢者、手先の器用な高齢者が、他の参加者に教える、という行動が

見られた。高齢者が、サロンの中で役割を持つきっかけとなった。

- ・習字については、特に習字の好きな高齢者が、事業終了後も参加者の習字のお手伝いをしたい、と申し出て下さった。新たな高齢者スタッフの発掘につながった。

「もみじ台の地域の茶の間」は、参加者の協力を得て、助成事業終了後も、引き続き習字、手芸工作を自主的に実施することとした。また、交流を促進できるような文化的活動について、今後も検討してゆくこととした。

③ 決算報告書

収 入	大同生命厚生事業団助成金	100,000円
支 出		
①	工作材料代 (ハーバリウム、ガーランド材料)	11,448円
②	習字テキスト・習字用筆記用具代	8,640円
③	習字練習用紙・小学生用テキストコピー代	2,215円
④	習字講師謝礼・交通費・材料代 (1回5,000円×3回)	15,000円
⑤	茶菓子代 (5回、延べ249名分)	40,237円
⑥	手づくり軽食材料代 (1回、54名分)	14,719円
⑦	文房具代 (領収書用紙)	138円
⑧	湯茶ポット (2台)	11,560円
	合 計	103,957円

活動の様子「真剣です」



「赤ペンがうれしい」



「小中学生もいっしょに挑戦」



「お菓子の手を休めて習字です」



「高齢者が子どもにアドバイスします」



「どこにかざろうかな」



「完成品は飾って品評会です」



「色使いきれいですね」



「はらごしらえの手作りおはぎ」



「おはぎの前に習字です」



「手先を動かすことって楽しいですね」



「今回の購入物品」

